

## あすかでらせいほういせき 飛鳥寺西方遺跡

### はじめに

飛鳥寺西方遺跡は、飛鳥寺跡の西側に広がる遺跡です。『日本書紀』によると、飛鳥寺西はまさに歴史の表舞台でした。壬申の乱（672年）では飛鳥古京の戦いの舞台となり、ほかにも蝦夷や隼人などの辺境に住む人々を招いて饗宴を行う場となりました。乙巳の変（645年）直前には、中大兄皇子と中臣鎌足が蹴鞠を通して出会った法興寺槻樹下も「飛鳥寺西」であったといわれています。この飛鳥寺西には、現在、石神遺跡と水落遺跡、飛鳥寺西方遺跡が広がっており、そのなかでも飛鳥寺西方遺跡は「飛鳥寺西の槻樹の広場」ではないかと推定されています。

この調査は、飛鳥寺西方遺跡の規模や構造を明らかにすることを目的とした範囲確認調査です。飛鳥寺西方遺跡の発掘は今回の調査で10年目になります。調査位置は、飛鳥寺西門跡から西に約140mの位置になります。今回の調査は、遺跡の西限を明らかにすることを目的に調査しました。

### 主な検出遺構と出土遺物

今回は、調査区を3箇所に分け、北から順に1～3区と設定しました。1区では石組溝1条と建物跡を検出しました。石組溝は上面が平坦な15～20cm大の石を敷き詰めて溝の底石としています。溝幅（底石の幅）は90cmを測りますが、東西方向に伸びる底石に沿って両側には溝の側石を抜き取った痕跡があります。この石組溝は隣接して行われた飛鳥京跡第168次調査でも延長部分が確認されており、少なくとも長さ21m分にわたって延びていました。建物跡は東西方向に展開する横長の建物です。建物の柱穴は1区のさらに外側に広がるとみられ、建物規模は確定できませんが、東西8間以上の長大な建物であったことがわかります。柱間は柱掘形の芯々でみると東西が2.4m等間、南北は4.8mを測ります。柱の掘形は一辺が90～135cmを測り、平面形は隅丸方形を呈しています。掘形の深さは44～72cmと比較的浅く、柱穴が掘り込まれた飛鳥時代の遺構面上部が削られてしまったためと考えられます。

そのほか、2区では焼土を包含した土坑や、3区では集石遺構と掘立柱建物を検出した。3区の集石遺構は人頭大の石と拳大の礫が不揃いに敷き詰められた遺構です。後世に攪乱を受けたものですが、2区周辺まで飛鳥時代の石敷が広がっていたと思われます。掘立柱建物は古代以降の建物跡です。

出土遺物は調査区で土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、瓦、陶磁器、銅製品、鉄製品が確認できました。飛鳥時代の遺物は少ないですが、奈良時代から平安時代にかけての遺物が多く、飛鳥時代以降の土地利用が活発であったことがみてとれます。

### まとめ

調査の結果、飛鳥川に近い1区で飛鳥時代の建物跡と石組溝が確認されました。これらの遺構は、飛鳥川の氾濫原（砂礫層）の上に整地土を置き、その上に築かれています。飛鳥寺西方遺跡は飛鳥寺西門から飛鳥川周辺まで広範囲にわたって整地が施されており、槻樹の広場の範囲を検討する上で重要な成果となりました。また、これまで飛鳥寺西方遺跡は建物跡が少ないと思われていましたが、今回で4例目の確認となりました。このように続々と本格的な建物跡が確認されるということは、周辺の未調査部分においても建物跡が展開している可能性を窺わせます。そして、今回のような建物跡は、石神遺跡や水落遺跡と比較可能な建物跡であり、遺構の性格を「飛鳥寺西」全体の中で総合的に理解する必要があります。発掘調査によって明らかになった飛鳥寺西方遺跡は、飛鳥時代において、日本の国家形成を考える上でも重要な位置を占めているといえます。

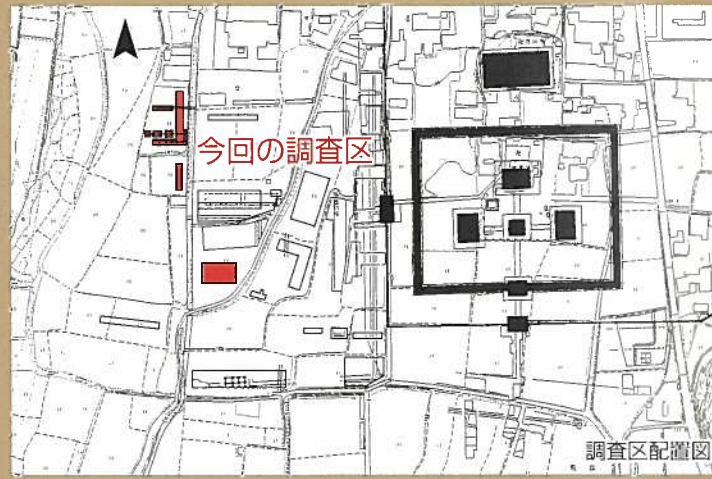
# 飛鳥寺西方遺跡



2018年2月

明日香村教育委員会





2区全景 (北西から)



3区全景 (西から)



1区全景 (南東から)



1区 建物跡 (東から)



1区 石組溝 (東から)



石組溝  
1区

建物跡

2区

村教委平成20年度

村教委平成26年度

建物1

建物2

石組溝

村教委平成25年度

飛鳥京跡第77次

集石遺構

3区

掘立柱建物

村教委平成24年度

石組溝

村教委平成27年度

石列

飛鳥京跡第168次

調査区全景 (上が北)